

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19590510  
 研究課題名（和文） 医学生の「死の教育」への模擬患者導入の教育的効果の研究  
 研究課題名（英文） Study on the Effect of Simulated Patients in 'Death Education' for Medical Students  
 研究代表者  
 植村 和正 (Uemura Kazumasa)  
 名古屋大学・大学院医学系研究科・教授  
 研究者番号：40303630

研究成果の概要：医学生は「死の教育」を受けることにより、「死への恐怖心」を減少させた。自由記述の中で、死生観の多様性への気づきや患者対応への配慮に言及するなど、終末期のコミュニケーション能力涵養につながった。終末期臨床場面を想定して医学生が抱く不安分析からは未経験という要因が抽出された。2007度に作製した模擬患者を導入しての映像教材は、講義の振り返りに効果的であった。この教材を元に、2008度は自学自習用教材を試作した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：死の教育、終末期医療、医学教育、模擬患者、自学自習用DVD

## 1. 研究開始当初の背景

近年取り組まれている医学教育改革の方向性として、全人的医療を担うための『コミュニケーション技能』、『患者やその家族への共感的態度』、『患者の権利の理解』が重要視されている。「死の教育」という分野において、これらの教育目標を達成することは、医学生にとって重要である。

欧米では、ほとんどの医学校のカリキュラムに「死の教育」が盛り込まれており、施設実習を取り入れたコースもある。一方、わが国では必修カリキュラムに組み込まれている医学部は少なく、効果的な教育方法も確立していないのが現状である。

我々はこれまでに、終末期医療教育や死生観についての全国調査を実施し、平成12年度より名古屋大学医学部5年生へ「死の教育」を行ってきた。それらの教育研究活動の結果、実地臨床実習開始以前の時期に必要な知識・技能・態度を習得する必要性があきらかとなった。

本学の医学教育カリキュラムの中で、臨床実習開始以前に、学生が自ら死生観を深め、死についてのコミュニケーション能力を習得するような実習は他で行われておらず、必要性が高い。

核家族化の進行や病院死の増加などで身近に死を感じる機会がない医学生たちにと

って、より改良された「死の教育」プログラムを通して、自らの死生観を形成しながら患者とコミュニケーションを持つための心の準備ができることは意義深い。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、臨床場面に則した自己学習可能な「死の教育」プログラムを開発し、それによって学生たちが「医の倫理と生命倫理」を尊重する態度を獲得し、自己決定権を含む患者の権利やインフォームド・コンセントのあり方を理解し、終末期という困難な場面におけるコミュニケーション技能を効率的・効果的に習得することにある。そのため以下の5つの具体的目標を設定した。

- (1) 終末期臨床場面で医学生の不安や恐れを引き起こす要因の抽出と解析
- (2) 終末期臨床場面における医学生の心理的・情緒的反応の抽出と解析
- (3) 終末期の倫理的諸問題の理解を目的とした介入方法の開発と効果の検証
- (4) 模擬患者を用いた教育方法の開発とその効果の検証
- (5) 効果的な自学自習用DVD教材の開発とその検証

## 3. 研究の方法

「死の教育」の講義を2時間実施する。対象となるのは医学部5年生の学生である。その前後で、死に対する考え方などを問う質問紙調査を実施する。また、この講義の様子をビデオカメラやICレコーダ、筆記などにより記録し、講義終了後の分析対象とする。

### (1) 「死の教育」プログラムの効果検討

- ① プログラム実施前後で質問紙調査を行う。
- ② 質問紙調査の結果のうち数値化できるものは数値化し統計学的な検定などの解析を行う。自由記述形式のデータは質的分析法により記述内容をカテゴリー化し、全体の傾向や構造を把握する。
- ③ 「死の教育」プログラム中のグループディスカッションとロールプレイを撮影及び録音してその結果を逐語録に起こす。これを質的研究の手法により分析し、グループディスカッションやロールプレイでの会話を進める際の論点や結論に関連する要因の構造を明らかにする。

### (2) フォーカス・グループ・インタビューによる検討

- ① 「死の教育」プログラム受講者の中から同意を得られた者を対象としてフォーカス・グループ・インタビューを実施する。インタビューの内容は逐語録に起こし、質的分析の手法により、

学生が終末期医療に取り組む際に感じる不安や恐れを明らかにする。また、今後「死の教育」を充実させるために、受講生から出された「死の教育」への感想や要望についても尋ねる。

### (3) 「死の教育」プログラムの改訂と教材作成

#### ① 死の教育プログラム内容の改訂

上記(1)、(2)の結果を踏まえ、「死の教育」プログラムの内容を、より学生の不安を軽減し、終末期医療に取り組む際の準備となるようなものに改訂する。

#### ② ロールプレシナリオの改訂

現行のロールプレシナリオを、上記(1)の③での分析結果に基づいて改訂する。また、現行のシナリオとは異なる展開となるシナリオも逐語録をもとにして複数作成する。

#### ③ 模擬患者のトレーニングとシナリオの改訂

改良されたシナリオに基づいて、名古屋大学SP研究会所属の模擬患者のトレーニングを行う。各シナリオを読み、演じる中でシナリオとしての自然さや演じやすさを模擬患者に検討してもらい、必要な改訂を加える。

#### ④ DVD教材作製と「死の教育」への適用、および自学自習用DVDの作成

改良されたシナリオをもとに、模擬患者がロールプレイを演じたDVD教材を作成する。この教材を「死の教育」の中で学生に視聴させ、講義後の質問紙調査結果と、DVD視聴を行わなかった学生の結果とを比較する。さらに「死の教育」のプログラムを自習できる形で取り入れ、自学自習用DVDを作成する。

## 4. 研究成果

### (1) 「死の教育」プログラムの効果検討

大阪大学臨老式死生観尺度を用いて質問紙調査を実施した。まず2007年度分のデータをもとに講義前と講義後の死生観の変化を調べたところ、7因子のうち「死後の世界観」「死への恐怖」「死への関心」の3因子に統計的に有意な変化がみられた。この結果を日本老年医学会東海地方会においてポスター発表をした。

さらに大垣女子短期大学紀要に速報として投稿し、査読を通過し、現在印刷中である。

2008年度のデータについて解析したところ、7因子のうち「死後の世界観」「死への恐怖」「死への関心」の3つで統計的に有意な変化が見られた。これらの因子は学会発表、紀要発表の分析結果とまったく同じ3つであ

った。速報のデータとなった 2007 年度の学生と、今回分析した 2008 年度の学生との間に同一傾向の結果が出たということは、本研究の普遍性を表すものといえる。

(2) フォーカス・グループ・インタビューによる検討

フォーカス・グループ・インタビューをもとに、学生たちの不安や恐れは、「未経験」という共通した意識から 4 つの相 (Spiritual Aspects、Medical Aspects、Psychological Aspects、Social Aspects) に分類されるという構造解析に到達している。

(3) 「死の教育」プログラムの改定と教材作成  
教材の改訂については以前のシナリオに、【人生の最期の過ごし方】という視点が入るよう一部改訂をくわえた。学生が行ったロールプレイの記録から実演例 3 種を選び、それをもとにスキットシナリオを作成した。

2007 年度にこの 3 種のスキットシナリオを映像化するに当たっては、名古屋大学 SP 研究会の模擬患者、および、本大学附属病院の医師の協力を得た。これを DVD 教材として作成し、2008 年度の講義において使用した。

また、自学自習に使用することができるよう、「死の教育」プログラム進行に基づいた DVD 教材を試作品が完成した。さらに内容を検討してレベルアップを行う。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

- ① 旭多貴子、茂木七香、阿部恵子、葛谷雅文、植村和正、「死の教育」前後における医学生<sup>1</sup>の死生観の変化、大垣女子短期大学紀要、印刷中、2009、(査読有)
- ② 平川仁尚、葛谷雅文、植村和正、高齢者の終末期ケアに関する教育内容について、医学教育、印刷中、2009、(査読有)
- ③ 田辺政裕、平出敦、大西弘高、植村和正、岡田唯男、(11 名 4 番目)、卒前医学教育から卒後研修への移行～研修開始時に研修医が具有しているべき能力に関する調査～、医学教育、39(6)、387-396、2008、(査読有)
- ④ 平川仁尚、葛谷雅文、植村和正、医学科で推薦されている終末期ケアに関する教科書の内容、ホスピスと在宅ケア、16、214-217、2008、(査読有)
- ⑤ 阿部恵子、藤崎和彦、伴信太郎、模擬患者の協力を得た身体診察実習の今後の方向性、日本保健医療行動科学学会年報、23、59-73、2008、(査読有)
- ⑥ 阿部恵子、鈴木富雄、藤崎和彦、伴信太郎、標準模擬患者の練習状況と OSCE に対する意識：全国調査第 2 報、医学教育、

39(4)、259-266、2008、(査読有)

- ⑦ 阿部恵子、藤崎和彦、丹羽雅之、鈴木康之、Phillip Evans、独自性豊かな SP プログラム：スコットランド 5 大学視察報告、医学教育、39(3)、199-204、2008、(査読有)
- ⑧ 平川仁尚、益田雄一郎、葛谷雅文、井口昭久、植村和正、終末期医療・看護教育に関する医学生の意識調査、日本老年医学会雑誌、44、380-383、2007、(査読有)
- ⑨ 平川仁尚、益田雄一郎、葛谷雅文、井口昭久、野口美和子、植村和正、終末期医療・看護に関する授業と医学生の死生観との関係、日本老年医学会雑誌、44、247-250、2007、(査読有)
- ⑩ 阿部恵子、日本の模擬患者の状況および満足感と負担感：全国調査第 1 報、医学教育、38、301-307、2007、(査読有)

〔学会発表〕(計 9 件)

- ① 茂木七香、医学生への Death Education、語りと回想研究会、2009 年 3 月 7 日、東洋大学白山キャンパス
- ② 旭多貴子、茂木七香、阿部恵子、葛谷雅文、植村和正、「死の教育」前後における医学生<sup>1</sup>の死生観尺度の変化に関する研究、日本老年医学会東海地方会、2008 年 10 月 25 日、名古屋大学
- ③ 阿部恵子、学生による模擬患者参加型医療面接実習の評価：平成 17・18 年度アンケート調査から、日本医学教育学会、2007 年 7 月 27 日、盛岡市
- ④ 阿部恵子、鈴木富雄、宮崎景、佐藤寿一、伴信太郎、総合診療部 5 年次 Advanced OSCE 型実習に協力する SP の養成と評価、日本医学教育学会、2008 年 7 月 24 日、東京医科大学
- ⑤ 田辺政裕、平出敦、木川和彦、日下隼人、植村和正、(11 名、10 番目)、卒後研修の前後で求められる研修医の能力についての全国調査、日本医学教育学会、2008 年 7 月 24 日、東京医科大学
- ⑥ 河本慶子、古賀愛人、松田公志、西川光重、植村和正、(8 名、8 番目)、卒前教育におけるコミュニケーションおよび問題解決能力の養成プログラムの実態、日本医学教育学会、2008 年 7 月 24 日、東京医科大学
- ⑦ Abe Keiko、Fujisaki K.、Suzuki Y.、Ban N.、What do SPs feel about their experience in an OSCE trial in Japan: Implications for SP training in standardization、Association of Standardized Patient Educators、2008 年 7 月 1 日、アメリカ・サンアントニオ

- ⑧ Abe Keiko、Perceptions of Simulated patients and Simulated patient Trainers about Simulated Patient's participating in examination in medical students' training: Findings from a national survey in Japan、An International Association for Medical Education、2007年8月28日、ノルウェイ・トロンドハイム
- ⑨ 井平雅恵、植村和正、スキルス&ラボラトリー解説と運営～他施設との比較からみえた今後の課題～、日本医学教育学会、2007年7月27日、盛岡市

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

植村 和正 (Uemura Kazumasa)  
名古屋大学・大学院医学系研究科・教授  
研究者番号：40303630

### (2) 研究分担者

茂木 七香 (Mogi Nanaka)  
大垣女子短期大学・幼児教育科・講師  
研究者番号：90450840

### (3) 連携研究者

阿部 恵子 (Abe Keiko)  
岐阜大学・医学部・助教  
研究者番号：00444274

### (4) 研究協力者

葛谷 雅文 (Kuzuya Masahumi)  
名古屋大学・大学院医学系研究科・准教授  
研究者番号：10283441

旭 多貴子 (Asahi Takiko)  
名古屋大学・大学院医学系研究科・大学院  
生